

(1912) 書籍『美術解剖学ノ栞』には「……(略)果シテ聴講者諸氏ノ言ハルル通りニ利益ガアツタカドウダカ知ラナイガ、兎ニ角先項ノ博多人形原型品評会ニ行ッテ見タラ、餘程筋ヤ骨ノ見エル作品ガ並ンダ居タノデ、自分ハ少ナカラズ嬉敷感シタノダッタ……(略)」と記述がある。

## 2. 解剖学 櫻井恒次郎教授と日本画家 矢田一嘯

櫻井恒次郎先生は、明治34(1901)年、東京帝国大学医科大学を卒業し、ドイツ留学からの帰国後、同39年に解剖学第2講座教室の教授となった。櫻井氏は、研究の実地応用にも尽力、博多人形師の依頼に応じた。大正6年5月、『矢田一嘯先生記念展覧会(写真1)』は、関係性を知る上で、極めて貴重な資料となる。

### 【むすびにかえて】

人形作家集団の「温故会」の活動は、業界外の知識人を引き入れて、明治期末に活発に展開しており、京都帝国大学福岡医科大学(現在の九州大学)中山森彦博士の紹介により、同大学の解剖学が専門の櫻井恒次郎教授が参与し、大正3年、4年に組合員の一部が、同大学解剖学教室にて実習を伴う講義に参加した。現在、当時の博多人形師白水熊次郎の子にあたる白水宗邦氏の元に、熊次郎の手による約二分の一大の半身の骨格標本が残されており、頭蓋骨は本物の持つ多孔質の部分や縫合線などが、一見本物と見間違うほどに細工され、歯などは差し歯とは思えるような表現がなされている。中ノ子タミ家にも同様のものが残されており、参加者が受講内容をもとに制作したものと考えられる。近代博多を代表する博多人形師小

島与一、原田嘉平らも解剖学講義・解剖実習を行い、5名の福岡県無形文化財の一人となった。博多人形は、人体解剖実習を機に写実的な表現を志向するようになり玩具から美術品へとジャンルの昇華を遂げたと評価されている。

大宰府市教育委員会文化財課職員山村信榮氏は、矢田一嘯は、洋画家として先達のミケランジェロやレンブラントの美術と解剖学の関係を博多人形に持ち込んだのではないかと推察する。本研究は、本学解剖学教室の未整理器物資料との関連性の解明が重要となる。

**謝 辞** 本調査にあたり、福岡市博物館 有馬學館長、末吉武史主任学芸主事、大宰府市教育委員会文化財課職員 山村信榮先生、九州大学医学図書館職員文献調査係 詫間 沙由香女士・泉 愛女士・岩崎 崇宏史氏、Wolfgang Michel九州大学名誉教授にご指導・ご支援を賜った。博多人形に関する資料は、博多人形店(後藤人形・増屋)、博多人形沿革史編纂員委員会：博多人形商工業協同組合の資料提供となる。ここに深謝を申しあげる。

### 主な参考文献・参考資料

- ・博多人形沿革史、博多人形沿革史編纂委員会、博多人形商工業、協同組合発行、平成13年3月・櫻井恒次郎著、美術解剖学ノ栞、南江堂書店、大正元年11月
- ・池嶋洋次、アジアのなかの博多湾と箱崎、大学と職人、九州史学研究会、pp.196-197、2018年10月・原田種夫、人形と共に65年 小島与一伝、1972年・福岡日日新聞、大正6年5月5日、5月20日、5月21日記事、他写真等は、紙面制約により割愛させていただいた。

(令和4年12月六史学会合同例会)

## 研究教育の「場」をめぐって～『洋学史研究事典』編集補遺

海原 亮

洋学史学会では、設立30周年を記念し『洋学史研究事典』を企画・刊行した(思文閣出版、2021年10月)。幸い学界から好評を得て、日本医史学会より第34回矢数医史学賞を受賞することが出

来た。編集委員のひとりとして、深く感謝を申し上げる。

本事典は「研究篇」「地域篇」2部構成とし、若手を主たる読者に想定、洋学史研究の今後の方向

性を示すべく意欲的な編集をおこなった。「グローバル」と「ローカル」の併置、というコンセプトは、現今の学界、とりわけ日本近世史研究のありように対する問題提起でもある。また、コロナウイルス流行以降、学界運営のオンライン化が著しく進展し、紙媒体の会誌ひいては、学術出版の存在意義すら問われ直される時代となった。そのような状況下で今回、編集を通してみてきた現状と課題については、報告者を含む編集委員3名の鼎談(思文閣出版広報誌『鴨東通信』No.112 2021年4月)、および本会誌『洋学』第29号(2022年)「刊行記念座談会」に掲載した。是非お目通しいただきたい。

報告者が編集を担当した、研究篇「V 研究教育の場」は「その時代、その土地にない新奇の学問がどのように伝わり、普及したのか。洋学という営みを、当該社会の特質を踏まえて評価する」という視角を重視している。すなわち、学問の担い手＝洋学者の社会的存在形態を前提とし、学問浸透の地域格差を精緻に描き出す試みである。

洋学伝授の「場」「空間」は、おもに「教育施設」「社会の要請で設置された専門の研究機関」「個別の学問交流」、3つの様態に分けられようが、このあたりの中身も前述『洋学』「刊行記念座談会」の報告者発言に委ねたい。

要は、当該期における教育の現場、実態をうかがうためには、一次史料を虚心坦懐に読むことに尽きるということだ。報告者は以前から、教育史などの通説に疑問を呈してきた。むろん同分野でも辻本雅史氏の「教育社会」論など、近年あらたな概念は提唱されているようだが、方法論の鍛え直しは喫緊の課題ではないかと考えている。この点、研究事典の「総論」で吉田忠氏が、オランダ語の学習過程について「蘭学塾の実態の解明を要する。『福翁自伝』ですませる段階はとうに過ぎている。用いられたテキストの内容分析や指導方法など、まだ研究の余地はありそう」と指摘されたことは、実に示唆的である。

報告者は現在、越中国高岡の蘭方医佐渡家文書の分析を進めている。同家9代養順(1820-79)は坪井信良の実兄で、医薬の家業のかたわら蘭書翻

訳に執心した。養順の就学履歴は、同家文書の「履歴明細書」(明治6年)などから判明するが、それによると天保6年(1835)金沢で儒学修業の後、同9年より京都の小石元瑞門に入り3年11ヶ月「蘭書習読蘭方内治医学修行」を経験、さらに同13年には江戸で古賀侗庵にも入門している。西洋医学修得の前提として儒学の基礎教養を重視する、当時の医人たちの認識が顕著に読みとれよう。

もっとも養順が小石門で如何に洋学を学んだか、その実態をうかがい得る史料は限られている。佐渡家文書中には、修業完了を証明する書類(宛理堂主人「許可」)が確認でき、そこに同封されている「龍門楼日課目録(木版)」が興味深い。同史料は12種の基本医書を列挙するが、洋学書といえるものは「解体新書」「内科撰要」のみに限られ、他は全て中国医書の古典である。この事実も当時の蘭学塾就学の特質を示すものだろう。なお、小石門下の教育動向(講義、テキスト、写本活動の様子など)については、『京都の医学史』にも収載されている、塾生内山謙吾の「日記」が参考になる。

佐渡家文書にみえる医学教育関係史料としては、他に「(富山病院内医学所分設)入学手続(明治10年)」や、養順の息敬吉在学時の「東京大学医学部通学生規則(明治12年)」などがある。報告では画像を示すのみで詳しい紹介はできなかったが、明治初期の県内医制は細かい変遷をみせており、詳しい検討を要する。当該地域で近代医学教育が如何に実現したか、適切に評価するにはなお一次史料の探索が欠かせない。また、高岡の医療環境を解明するさい金沢藩(養生所、医学館)との関係は決して捨象できないが、この視角は正橋剛二氏の先行研究などに学び、さらに考察を加えていく予定である。

極めて雑駁な報告ではあったが、当日は洋学を中心とした教育史の方法論について課題をいくつか提言した。報告者は今回の『洋学史研究事典』編纂を通じ、議論の俎上に載せるべき一次史料がなお全国に埋没している、との印象を強く持つことができた。今後は、地域史研究の最前線と密に連携しつつ、それらの発掘と分析に取り組んでい

きたい。とりわけ洋学修業者に関する私的史料（日記、帳簿、書簡など）は、未だ十分な検討が為されていないようだ。会員諸氏からの情報提供に

も大いに期待している。

（令和4年12月六史学会合同例会）

## 1889～91年“旧ロシアかぜ”は “コロナウイルス”によるものだったか？

——インフルエンザウイルス循環からの考察——

逢見 憲一

2020（令和2）年以降、COVID-19、いわゆる“新型コロナウイルス”の大規模な流行が始まったが、昨今、1889～91年に流行した“旧ロシアかぜ”が、“コロナウイルス”による流行だったのではないかと、との学説が取りざたされている。本報告では、あらためて、1889～91年に流行した“旧ロシアかぜ”“スペインかぜ”を含む19世紀後半から現代に至るインフルエンザ流行の歴史を追い、“ウイルス循環”の観点から検討した。また、COVID-19によるわが国の健康被害を、“超過死亡”を算出して定量的に把握する試みについても報告した。

富士川游によると、わが国において「源氏物語」や「増鏡」に「シハブキヤミ」の記述があり、当時の医書「医心方」にも「咳嗽」の病名が挙げられていた。その中にはインフルエンザが含まれていたと考えられる。また富士川とHirshの記述をもとに比較すると、1832（天保3）年（“琉球風”）1850（嘉永3）年の流行（“アメリカ風”）以降の西洋諸国のインフルエンザ流行にともなってわが国でも流行が生じていたと考えられる。

1889（明治23）年にロシアで始まり、わが国にもたらされたインフルエンザ、すなわち、“旧ロシアかぜ”の流行は、“パンデミック（pandemic）”の語が、初めて現代的な意味で、また全世界で用いられた流行であった。そのわが国における猛威は、岡本綺堂の随筆や木版画“はやり風用心”などによっても知ることができる。このパンデミックはその強力な感染力から“お染風”の別名で恐れられた。演者は、府県統計書および「東京府下

死亡一週表」等の資料を用いて、このパンデミックを含む時期のインフルエンザによる超過死亡を推計した。東京および神奈川県では、1889（明治22）年から1890（明治23）年には超過死亡はみられず、超過死亡がみられたのは1891（明治24）年1月からで、少なくとも本格的な流行は、ヨーロッパから1シーズン遅れていたと考えられる。

第二次大戦後、1957（昭和32）年に“アジアかぜ”のパンデミックが、1968（昭和43）年には“香港かぜ”のパンデミックが起こった。これらに関して、1890（明治23）年以前に生まれた世代が、香港かぜと同じH2亜型のウイルスへの抗体を有していることから、その時期のパンデミック、すなわち“旧ロシアかぜ”（“お染かぜ”）はH2亜型のウイルスによってもたらされていたという説、“ウイルス循環説”が提唱され、この説が正しいとすれば、上述の“旧ロシアかぜ”コロナウイルス説への反証となるが、どちらの説も確証があるとは言い難い。当時のウイルスの遺伝子分析などによる確証を待つ必要があろう。

一方、2009（平成21）年のH1N1パンデミック以降、新たな局面を迎えたと演者は考えている。2009H1N1ウイルスは、スペインかぜウイルスに類似していたことが知られているが、2009（平成21）年のパンデミック以降、80歳代後半以降の超過死亡が激減しており、この年齢集団が1920～30年代にスペインかぜウイルスと2009H1N1ウイルス双方に類似したウイルスに感染して、それらへの抗体、すなわち抗原原罪（Original Antigenic Sin）